

児玉町遺跡調査会報告書 第17集

児玉大久保遺跡

－ C 地点の調査 －

埼玉県児玉町遺跡調査会

児玉町遺跡調査会報告書 第17集

こ だま おお く ぼ い せき
児 玉 大 久 保 遺 跡

— C 地点の調査 —

2004

埼玉県児玉町遺跡調査会

序

児玉大久保遺跡は、小山川を臨む児玉地区の河岸段丘上に位置しております。この児玉地区は、古くから市の栄えた土地として知られております。その川岸には、多くの埋蔵文化財が確認されておりますが、近年は、古くから残されてきた景観が次々と姿を変えております。

ここに報告する大久保遺跡のある区域も、児玉町の市街の西側に位置し、国道付近に位置しておりますところから開発が進み、急速に古い歴史的な景観が失われつつあります。このたび、この土地に刻まれた先人達の歴史的な営みの痕跡である埋蔵文化財は、ここに記録として保存し永く後世に伝えることになりました。これらの埋蔵文化財は、将来私たちの文化的な生活を形づくるためのひとつの基礎となりえるものであり、これらを守り、伝えて行くことはもとより、地域の理解のために生かしてゆくことが、今後の文化財保護の課題とってよいでしょう。

ここに、この発掘調査報告書が刊行できましたことは、有限会社セイワ工業をはじめとする関係各位ならびに関係諸機関の皆様のご協力の賜と深く感謝いたします。このささやかな報告書は、埋蔵文化財の保護・活用にとっての第一歩であるに過ぎませんが、この地域の住民皆様はもとより、教育や研究にたずさわる皆様のご参考となりえるならば幸いです。

平成16年3月11日

児玉町遺跡調査会
会長 雉岡 茂

例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字児玉字下久美塚1596-3外に所在する児玉大久保遺跡C地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、有限会社セイワ工業の倉庫建設に先立つ埋蔵文化財保存事業として、平成6年度に児玉町遺跡調査会が実施したものである。
3. 発掘調査及び整理・報告に要した経費は、有限会社セイワ工業の委託金である。
4. 本報告にかかる発掘調査は、徳山寿樹が担当した。また、本書の編集および執筆は鈴木徳雄の協力を得て櫻井和哉が行った。
5. 発掘調査及び本書の作成にあたって下記の方々や機関から御助言・御協力を賜った。(順不同、敬称略)

赤熊浩一、井口泰基、池田敏宏、江原 英、大倉 潤、太田博之、大屋道則
金子彰男、小宮山克己、坂本和俊、笹森健一、篠崎 潔、外尾常人、田村 誠
千装 智、利根川章彦、鳥羽政之、永井智教、中沢良一、長滝歳康、中村倉司
平田重之、増田一裕、丸山 修、宮本直樹、矢内 勲、山口逸弘、弓 明義
埼玉県教育局文化財保護課、児玉都市文化財担当委員会、東海大学考古学研究会

凡 例

本書に掲載した遺構図、遺物実測図及び遺物観察に関わる指示は以下のとおりである。

1. 遺構番号は同遺跡A・B地点からの通番である。
2. 遺跡・全体図等におけるX・Y数値は、平面直角座標IX系(原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒)に基づく座標値を示す。
3. 測量、実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。
遺構 1：60
遺物 1：4
4. 土層断面図における水糸高は全て標高88.000mの高さである。
5. 遺物図版中の番号は写真図版中の番号に対応している。

目 次

序

例言・凡例

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第Ⅲ章 遺構と遺物の概要	7
1. 遺跡の概要	7
2. 遺構の概要	8
3. 遺物の概要	15
第Ⅳ章 児玉大久保遺跡出土の土師器大形甑	17
引用・参考文献	23

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	児玉大久保遺跡の位置	2
第2図	周辺の遺跡	4
第3図	児玉大久保遺跡の調査地点	6
第4図	周辺の地形と遺跡	7
第5図	児玉大久保遺跡C地点全体図	8
第6図	基本土層および第48・49号住居址土層断面	10
第7図	第49号住居址カマド	11
第8図	第50・51・52号住居址土層断面図	12
第9図	第53・54号住居址	13
第10図	児玉大久保遺跡C地点出土遺物	14
第11図	将監塚4期の土器群	21
第12図	土師器甕の出土事例	22

児玉町遺跡調査会組織

会 長	雄岡 茂	児玉町教育委員会教育長
理 事	田島 三郎	児玉町文化財保護審議委員長
	間正 明彦	児玉町文化財保護審議委員
	荒井 一夫	児玉町文化財保護審議委員
	桜井 豊	児玉町文化財保護審議委員
	杉村 義昭	児玉町総務課長
	前川 由雄	児玉町農林商工課長
	鈴木幸比古	児玉町土木課長
	立花 勲	児玉町都市計画課長
	清水 満	児玉町社会教育課長
監 事	清水 守雄	児玉町文化財保護審議委員
	出牛 博	児玉町総合政策課長
幹 事	永尾 清一	児玉町社会教育課長補佐
	鈴木 徳雄	文化財係係長
	恋河内昭彦	文化財係主任
	徳山 寿樹	文化財係主事
	大熊 季広	文化財係主事
	松澤 浩一	文化財係主事
調査員	尾内 俊彦	児玉町遺跡調査会調査員

第 I 章 発掘調査の経緯

平成6年7月1日、埼玉県児玉郡児玉町大字児玉字下久美塚1596-3番地外14筆における倉庫建設を前提とする「開発予定地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて」の照会文書が、神部国雄氏より児玉町教育委員会に提出された。当該区域は、周知の埋蔵文化財包蔵地である児玉大久保遺跡(No.54-043)に該当しているところから、町教育委員会は同年7月4日付けで試掘調査の必要がある旨の回答をした。これに基づき7月7日付けで神部国雄氏より「試掘調査依頼書」が提出されたので、同年7月14日に試掘調査を実施した結果、現状変更予定地内に古代集落跡等が存在していることが確認された。

協議の経緯

児玉町教育委員会は、この試掘調査の状況を踏まえ、試掘調査の結果を回答するとともに、埋蔵文化財の現状変更を最小限に実施するように指導するとともに、事業者である有限会社セイワ工業と協議を行った。これに基づいて、工事による埋蔵文化財への影響が避けられず、やむを得ず現状変更される区域の発掘調査を実施する必要が生じる旨の説明を行った。しかし、施工業者の手違い等により、調査実施前に建物基礎等の建設が着手され、かつ調査対象区域の主要な部分が掘削されたので、事業者に厳しく指導するとともに、再度の協議・調整を踏まえて、児玉町教育委員会の指導に基づいて、児玉町遺跡調査会と有限会社セイワ工業との間で埋蔵文化財保存事業委託契約を締結することで発掘調査を実施することとなった。

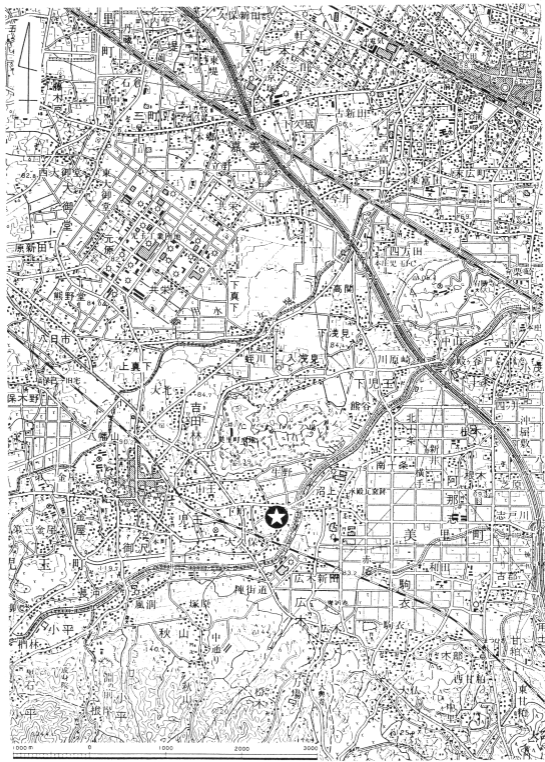
発掘の届出

平成6年12月6日に有限会社セイワ工業代表取締役岩井和志より文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。この届出に基づいて埼玉県教育委員会教育長から、平成7年3月30日付け教文第3-655号で有限会社セイワ工業代表取締役岩井和志に「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があった。

発掘調査の届出

また、児玉町遺跡調査会会長富丘文雄から文化財保護法第57条第1項の規定に基づいて「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が提出されたので、児玉町教育委員会は、同日、埼玉県教育委員会教育長あてに進達した。この届出に基づいて、埼玉県教育委員会教育長から、平成7年3月30日付け教文第2-182号で児玉町遺跡調査会会長富丘文雄に「埋蔵文化財発掘調査について」の通知があった。なお、現地の発掘調査は、児玉町遺跡調査会によって平成6年12月7日に開始され、平成7年1月20日に終了した。

(児玉町教育委員会社会教育課文化財係)



第1図 兒玉大久保遺跡の位置

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

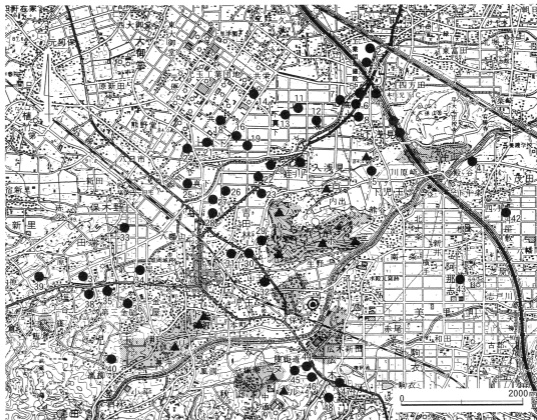
本報告にかかる児玉大久保遺跡C地点の所在する児玉郡児玉町は、埼玉県の北西部、関東平野の西端を構成する位置に存在している。町村界は、東は美里町、西は神川町・神泉村、南は秩父郡皆野町・長瀨町、北は本庄市・上里町に接している。市街地から本庄市へ向けて北東方向に国道462号線が延び、町の北東端で本庄市との境に所在する関越自動車道本庄児玉インターチェンジと交わる。また町の中央部を南東から北西に向かって国道254号線、これと交差しながら東日本旅客鉄道八高線が通っている。

周辺の地形

児玉町の地形は、秩父連山から連なる上武山地が南西に展開し、これが児玉町の半分近くの面積を占めている。この上武山地から北東方向に向かって児玉丘陵が突出し、その延長上に同じく第三紀層の丘陵である生野山・浅見山が点列状に存在している。この上武山地から連なる児玉丘陵、生野山・浅見山は、神川町新宿付近に扇頂を有する神流川扇状地の南限を画している。この神流川扇状地は本庄台地とも呼称されるが、この南西部分、ちょうど児玉町に相当する区域は、神川町二宮金鑽神社を水源とする金鑽川と、児玉町宮内付近から発する赤根川が合流して成る女堀川によって開析された沖積低地を形成している。児玉丘陵の南側には、小山川（身馴川）を挟んで同じく上武山地から松久丘陵が展開し、陣見山山麓から発する志戸川水系の小河川によって開析され複雑な地形を呈している。この丘陵の眼下には身馴川・志戸川によって扇状地が形成され、志戸川水系の河川によって開析された沖積地に水田が営まれた。圃場整備前は条里型地割も認められ、十条条里は一部が県指定史跡に指定されている。この東側には、諏訪山・山崎山といった第三紀層の独立丘が北東方向へ展開している。こうした地勢の松久丘陵の北側の一角と身馴川の以北の区域が児玉町に属する。また、この身馴川は秩父郡皆野町浦山付近に水源を発し、児玉町大駄・河内・元田の谷間を流下し平野部に至る。そして本庄市五十子付近で女堀川と、岡部町西田付近で志戸川と合流し、利根川へ向かう。本遺跡付近では平常時は伏流し、水量は少なく、美里町十条付近で水量を増す。このため付近では、水田経営における灌漑用水の確保が目下の課題であり、古くから溜池灌漑に依存してきた地域である。

2. 歴史的環境

児玉町の歴史的環境は、各時代における開発のあり方と集落の動態との相関から把握してゆくことが可能である。児玉町では弥生時代の遺跡は少ないが、



第2図 周辺の遺跡

No.	遺跡名	備考	No.	遺跡名	備考
1	児玉大久保遺跡	本報告、他1991・1995調査	32	児玉清水遺跡	1995調査
2	地神遺跡	岩瀬1998	33	十二天遺跡	鈴木1981
3	今井条里遺跡	岩田1998	34	一町田遺跡	鈴木1981
4	後氣遺跡	立石他1983	35	枇杷横遺跡	菅谷・駒宮1973
5	川越田遺跡	赤熊他1986、恋河内1993	36	倉林後遺跡	利根川1981、1994調査
6	梅沢遺跡	赤熊他1986、恋河内1993	37	ミカド遺跡	鈴木1981
7	今井川越田遺跡	滝瀬1997他	38	塩谷下大塚遺跡	恋河内1990他
8	東牧西分遺跡	赤熊他1995	39	真鏡寺後遺跡	恋河内1991他
9	飯玉東遺跡	駒宮1979、恋河内1995	40	ウリ山遺跡	1981調査他
10	雷電下遺跡	駒宮1979	41	村後遺跡	細田他1984
11	藤塚遺跡	徳山1995他	42	日の森遺跡	菅谷1978
12	柿島遺跡	徳山1995	43	向居遺跡	岡本1987
13	堤向遺跡	徳山1995	44	秋山大町東遺跡	1999調査
14	符監塚・古井戸遺跡	赤熊他1988	45	秋山大町遺跡	1997～1999調査他
15	鷺山南遺跡	1983調査	46	諏訪平遺跡	1997～1999調査他
16	塚島遺跡	鈴木他1991	47	坂越神社前遺跡	中村1980
17	共和小学校校庭遺跡	恋河内1989他、1997調査	48	広木上宿遺跡	山本1996他
18	南共和遺跡	恋河内1995	No. 本遺跡周辺の主要な古墳 備考		
19	中下田遺跡	鈴木他1991			
20	蛭川坊田遺跡	1990調査	イ	鷺山古墳	坂本1986、2000調査
21	辻ノ内遺跡	鈴木他1991	ロ	金嶺神社古墳	坂本1986
22	辻堂遺跡	恋河内1996	ハ	生野山鏡子塚古墳	菅谷1984
23	南街道遺跡	恋河内1995	ニ	生野山16号墳	菅谷1984
24	真下境東遺跡	鈴木1989	ホ	生野山將軍塚古墳	菅谷1984
25	金佐奈遺跡	徳山1998他	ヘ	物見塚古墳	
26	鶴崎遺跡	恋河内1995	ト	長沖31号墳	
27	桶越遺跡	恋河内1995	チ	長沖32号墳	
28	高縄田遺跡	恋河内1995	リ	長沖79号墳	田口他1975
29	阿知越遺跡	鈴木1984	ル	秋山庚申塚古墳	坂本他1990
30	御林下遺跡	利根川1998他		秋山諏訪山古墳	坂本他1990
31	女池遺跡	恋河内1997他			

古墳時代前期から集落遺跡が増加する傾向を見せる。該期の集落の占地の特徴は、弥生時代は谷戸に面した丘陵部に立地する遺跡が多いのに対し、低地帯での遺跡の分布が増加する事である。児玉町の平野部の大部分を構成する女堀川流域の低地帯では、前期では後張遺跡・地神遺跡・浅見境北遺跡等が挙げられる。こうした集落遺跡の占地の傾向は中期・後期においても同様で、現女堀川兩岸の自然堤防上やこれの北側を字「藤塚」方面を迂回して流れる蛭川埋没河川跡（註1）沿いの微高地上に多く確認でき、今井条里遺跡で検出された古墳時代前期の水田跡が示すように、低地帯の開発の開始と相応するものである。低地帯の開発は、広域な水利に関わる利害関係を形成と同義であり、これは同時に水系を共有する地域の社会的統合の必要性を示唆するものである。この時、低地帯の開発期にあたる4世紀後半から5世紀の間に低地帯の南限を画する丘陵上に鷺山古墳を初めとする規模の大きい古墳が相次いで築造されることは注視すべき点である。

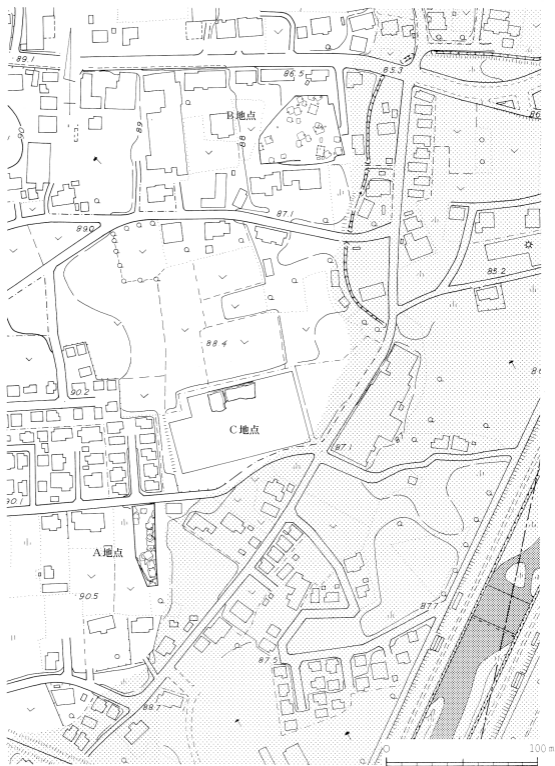
律令期の状況

律令期では古墳時代に低地内の微高地上に形成された集落は急激に減少する。低地を臨む台地の平坦面に展開する集落が新規に出現し、こうした性格の集落遺跡には今井遺跡群G地点、八幡太神南遺跡、将監塚・古井戸遺跡、皂樹原・松下遺跡などの事例が挙げられる。なかでも将監塚・古井戸遺跡は、集落の西側に北東へ向かって走る大溝の存在が示すように、生活用水の確保を前提として設営されていると考えられる点は特筆される（岩瀬、1988）。この大溝は「九郷用水」からの分水が想定され、かつ「九郷用水」の開鑿年代及びその灌漑区域である児玉条里の施工年代がほぼ同時期に求められることは（鈴木、1984a）、律令期における集落の占地、土地区画の変革等の景観の形成が計画的かつ構造的に進行したことを示している（鈴木、1984b）。該期の集落は概ね10世紀には解体されてゆくが、条里型地割と灌漑系統がその後の地域社会の共同性を再生産してゆく基盤として機能する点は重要である（鈴木、1997）。

以上のように、児玉町の歴史的環境は、開発の過程と集落の展開を相関させる形で把握することができる。この時、児玉大久保遺跡の所在する区域は、地形的な制約から隣接する女堀川水系、身馴川・志戸川水系の灌漑区域との関係が疎遠であるため、地域社会における有機的な一つの「単位」であるとみなすことができる。しかし、遺跡の立地する区域は、これまで調査・報告事例に乏しく十分な検討が及んでおらず、今後の位置づけが必要な区域である。

註

- (1) 蛭川埋没河川跡（鈴木、1995）は条里施工後も地割として痕跡ととどめており、流路を推定することができる。また、児玉町堀向遺跡、本庄市今井川越田遺跡ではこれに該当する河川址が検出されている。



第3図 児玉大久保遺跡の調査地点

第三章 遺構と遺物の概要

1. 遺跡の概要

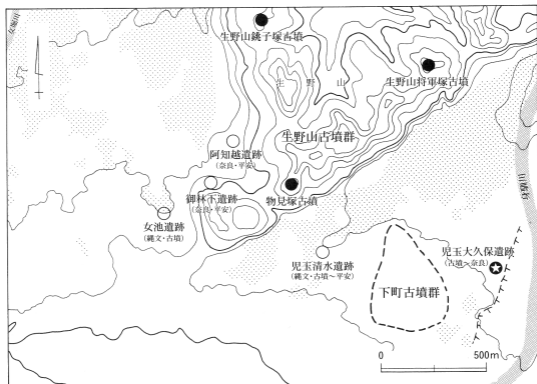
児玉大久保遺跡は、埼玉県遺跡地図 (No.54-043) に該当し、大字児玉字下久美塚に所在する集落遺跡である。本遺跡の西側には、かつては下町古墳群が存在し、またその北西の谷戸に面した微高地には古墳時代から平安時代までの住居址を検出する児玉清水遺跡が存在する。このように本遺跡の周辺は、古くから生活域・生産域としての土地利用の痕跡が窺われる。

A・B地点

本遺跡は、これまでにA・B地点が調査されており、A地点では古墳時代住居址8軒・平安時代住居址18軒が検出されている。B地点では、古墳時代住居址8軒、奈良・平安時代住居址13軒、掘立柱建物跡4棟などが確認されている(恋河内、2003)。これらの調査地点は、相互に近接し、同一の河岸段丘上に占地している [3図]。

C地点

今回報告するC地点の調査区は、調査実施前に倉庫建築に伴う大幅な攪乱を受けており [5図]、残存していた北側の帯状の区域のみの調査を実施した。検出された遺構は、住居址7軒、土壇2基が確認され、その時期は出土遺物から概ね真間期から国分期の範疇に収まるものである。



第4図 周辺の地形と遺跡



第5図① 児玉大久保遺跡C地点全体図 (1:150)

2. 遺構の概要

第48号住居址

調査区西端に位置し東壁付近の一部を検出し得た。詳細な時期は不明だが、第49号住居址との重複関係から真間期以降の所産であると推定される。

第49号住居址

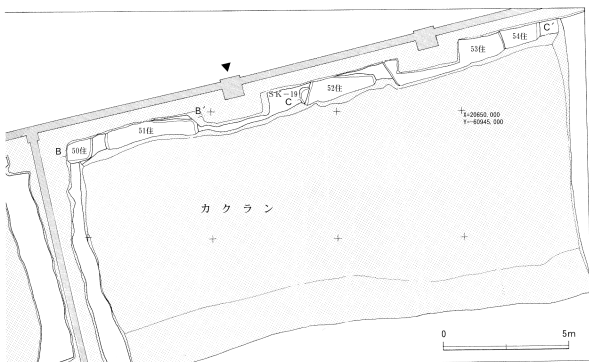
調査区西側に位置し東壁付近の一部とカマドを検出した。カマドはセクション上においてソデの残土を確認したが、明確な形と帰属する壁と形態を明確にすることができなかった。なお、ここで検出された立石は、支脚の可能性も認められるが、おそらくは袖石であろう。出土遺物には土師器杯、甗〔10図-1・5・6〕などが出土しており、真間期の所産である。なお、本住居址出土の杯の内の一点〔10図-7〕は、カマドからの出土であるが、形態的な特徴から混入であると考えられ、遺構の重複の可能性も予想される。

第50号住居址

調査区中央に位置し、住居址南東隅部分を検出している。遺構の帰属年代は不明である。

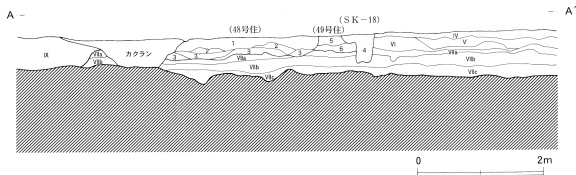
第51号住居址

調査区中央に位置し、住居址北側部分の1/5程度を検出している。遺構の帰属年代は不明である。住居址西側付近では、焼土と炭化物の集中部分が確認され、カマド等の火床の存在が示唆されるが、遺構としては検出し得なかった。



第5図② 児玉大久保遺跡C地点全体図 (1:150)

- 第52号住居址 調査区東側に位置し、住居址北側部分のの1/3程度を検出している。西壁が第19号土壌によって切られている。遺構の帰属年代は不明である。
- 第53号住居址 調査区東端に位置し、隣接する第54号住居址を切っている。
住居址中央付近の1/5程度を検出しており、東側に遺物が集中的に出土している。床面付近からの遺物の出土が多く、接合率も高い。なお、底部を欠いた甕 [10図-2] が正立の状態で見出されている。本址は、遺物の年代から真間期の所産であろう。
- 第54号住居址 調査区東端に位置し、隣接する第53号住居址に切られており、住居址の一部を検出している。須恵器杯・土師器杯・須恵器壺 [10図-8・9] 等を伴出しており、遺物の年代から真間期の所産である。
- 第18・19号土壌 ともに住居址を切って掘削されている。しかし、出土遺物や、火山灰等が確認されないため、遺構の具体的な帰属年代については限定できない。



第6図 基本土層及び第48・49号住居土層断面

堆積の状況

調査区は、身馴川の氾濫源にあたり、地山が小礫を多量に含む灰褐色系の粘土質を主体に構成される事から、自然堤防に立地することが確認された。また、遺構確認面は基本層第IV層に対比され、これより上層は耕作地として利用されていた。第VII b層までの層位まで焼土・炭化物の購入が認められ、第VII b層と第VII c層との層理には部分的に焼土面が確認された。第VII c層より下位の土層には土層に含まれる混入物質に人為的な痕跡を示すものを見出し得なかった。

基本土層

- 第I層：明灰色土(水田耕作土)
- 第II層：明灰茶褐色土層(田床)
- 第III層：明灰褐色土層(中・近世耕作土)
- 第IV層：明灰色粘質土層(第V層土をブロック状に含む。しまり・粘性ともにやや有り。)
- 第V層：暗灰色砂礫層($\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の砂礫を多く含む。)
- 第VI層：暗灰色砂層(きめ細かい砂と粘質土によって構成され、若干の鉄分を含んでいる。しまり・粘性ともに強い。)
- 第VII a層：明灰褐色粘質土(VI層に類似するが粘質土の比率が若干多く、色調が明るい。 $\phi 1\text{mm}$ 程度の炭化物を若干含む。)
- 第VII b層：明灰褐色粘質土($\phi 1\text{mm}$ 程度の炭化物を若干含む。しまり・粘性ともに強い。)
- 第VII c層：明灰褐色粘質土(VII b層に類似するが炭化物を含まず、粘質土の比率が高い。)
- 第VIII層：暗灰色砂礫層
- 第IX層：明灰色砂層($\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 程度の砂礫によって構成される。河川址であると考えられるが、第48号住居址を切っている。)

第48号住居址土層説明

- 第1層：暗灰褐色砂質土層(鉄分を全体的に、 $\phi 10\text{mm}$ 以下の砂礫を含む。しまりは強く、粘性は無い。)
- 第2層：暗灰褐色砂質土層(鉄分を全体的に、 $\phi 1\text{mm}$ 程度の炭化物を若干、砂礫を多量に含む。しまりは強く、粘性は無い。)
- 第3層：暗灰褐色砂質土層(2層に類似するが色調が暗い。)
- 第3'層：暗灰褐色砂質土層(しまり・粘性若干有り。)

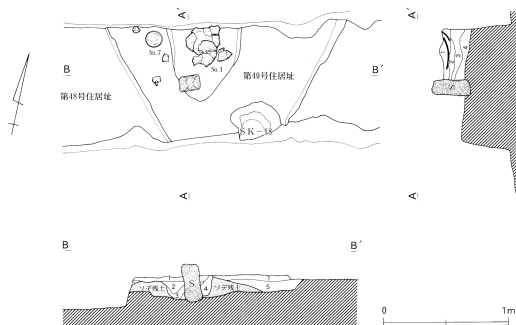
第18号土壌土層説明

第4層：暗灰褐色砂質土層（第1層に類似するが色調がやや明るい。）

第49号住居址土層説明

第5層：暗灰褐色砂質土層（第3層に類似するが色調がやや明るい。）

第6層：暗茶褐色砂質土（きめ細かい砂と粘質土によって構成されている。鉄分を全体的に、 \varnothing 1mm程度の炭化物を含む。）



第7図 第49号住居址カマド (1:30)

第49号住居址カマド土層説明

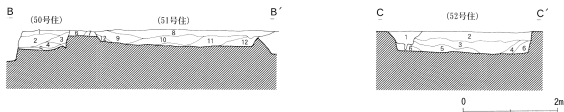
第1層：明灰褐色土層（ \varnothing 1mm以下の細砂と粘質土によって構成される。しまりはやや強く、粘性は無い。）

第2層：明灰褐色土層（第1層よりも色調が暗い。 \varnothing 1mm程度の炭化物粒子を若干含む。しまり・粘性ともにやや強い。）

第3層：明灰橙褐色土層（ \varnothing 1mm～10mm程度の焼土を多量に、 \varnothing 1mm程度の炭化物粒子をやや多量に含む。）

第4層：明灰褐色土層（ \varnothing 1mm程度の焼土・炭化物粒子を若干含む。しまり粘性ともにやや強い。）

第5層：明灰褐色土層（ \varnothing 1～10mm程度の砂礫を若干含む。しまり・粘性ともにやや強い。）



第8図 第50・51・52号住居址 土層断面図 (1:80)

第50号住居址

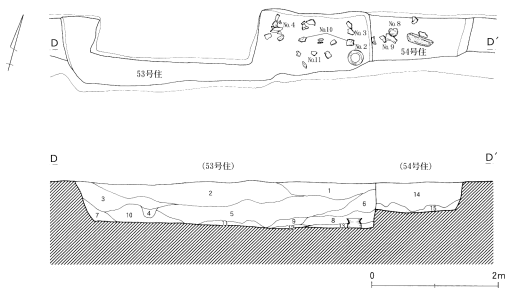
- 第1層 : 暗褐色土層(ϕ 1~2cmの砂礫を若干含む。しまり・粘性ともにやや強い。)
- 第2層 : 暗褐色土層(1層に類似するが、色調がやや暗い。しまり・粘性ともにやや強い。)
- 第3層 : 明褐色土層(VII層をブロック状に多量に含む。しまり・粘性ともに有り。)
- 第4層 : 暗褐色土層(ϕ 1~2mmの焼土・炭化物粒子を若干含む。しまり・粘性ともに強い。)
- 第5層 : 明褐色土層(VI層をブロック状に多量に含む。しまり・粘性ともに強い。)

第51号住居址土層説明

- 第1層 : 暗褐色土層(ϕ 1mm程度の白色粒子及び明灰茶褐色粘土粒子を若干含む。しまり・粘性ともに有する。)
- 第2層 : 暗褐色土層(ϕ 1~5cmの礫を含む。しまり・粘性ともに有する。)
- 第3層 : 暗褐色土層(ϕ 1~5mmの砂礫を多量に含む。しまり・粘性ともに有する。)
- 第4層 : 暗褐色土層(第3層に類似するが色調が明るい。)
- 第5層 : 暗褐色土層(第3層に類似する。 ϕ 1mm程度の焼土・炭化物粒子を若干含む。)
- 第6層 : 明褐色土層(IV層崩壊土。しまり・粘性ともに強い。)

第52号住居址土層説明

- 第1層 : 暗灰褐色土層(ϕ 1mm以下の白色粒子・炭化物粒子を若干含む。しまり・粘性ともに強い。)
- 第2層 : 明灰褐色土層(ϕ 1cm程度の砂礫を若干含む。しまり・粘性ともに有り。)
- 第3層 : 明灰褐色土層(2層に類似するが砂礫を含まない。)
- 第4層 : 灰褐色土層(灰褐色土(ϕ 1~5mm程度の炭化物、 ϕ 1mm程度の焼土粒子を若干含む。))
- 第5層 : 灰褐色粘質土層(ϕ 1~3mm程度の炭化物粒子を若干含む。しまり・粘性ともに強い。)
- 第6層 : 明灰褐色粘質土層(きめ細かい粘質土である。しまり・粘性ともに強い。)



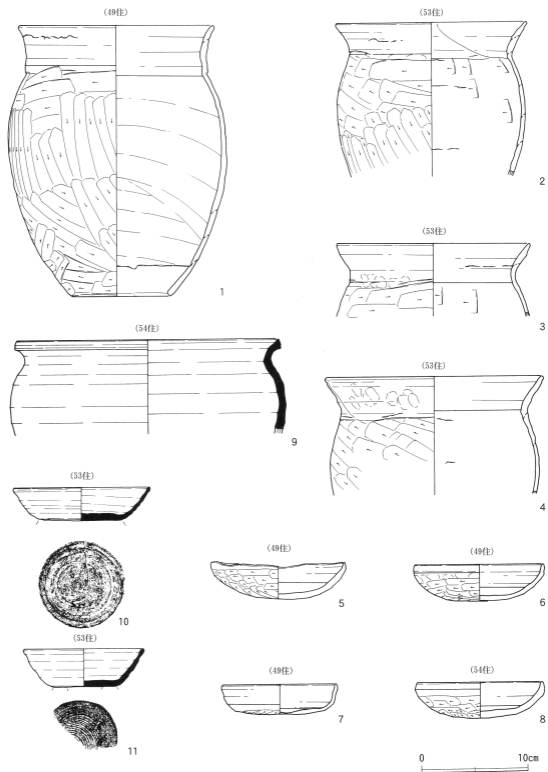
第9図 第53・54号住居址

第53・54号住居址土層説明

- 第1層：暗褐色土層(ϕ 1～3cmの小礫を全体的に含む。しまり・粘性ともに有する。)
- 第2層：暗褐色土層(1層に類似する。小礫を全体的にやや多量に含む。)
- 第3層：暗褐色土層(1層に類似する。小礫を全体的に多量に含む。)
- 第4層：暗褐色土層(1層に類似する。小礫を全体的に含む。)
- 第5層：明茶褐色土層(ϕ 5～20mmの小礫、 ϕ 1～2mmの炭化物粒子を含む。しまり・粘性ともに有する。)
- 第6層：明茶褐色土層(ϕ 1～3mm程度の炭化物粒子を若干含む。しまり・粘性ともに有する。)
- 第7層：明灰茶褐色土層(VI c層の風化土層。しまり・粘性ともに強い。)
- 第8層：明茶褐色土層(ϕ 1mm程度の焼土・炭化物粒子を若干含む。しまり・粘性ともに強い。)
- 第9層：明灰茶褐色土層(焼土粒子を多量に含む。しまり・粘性ともに強い。)
- 第10層：明茶褐色土層(ϕ 1～3cmの礫を若干含む。)
- 第11層：明灰茶褐色土層(ϕ 1～2mmの炭化物粒子を多量に含む。しまり・粘性ともに有する。)
- 第12層：明灰茶褐色粘質土層(ϕ 1mm以下の焼土粒子を多量に含む。しまり・粘性ともに有する。)
- 第13層：明灰茶褐色粘質土層(ϕ 1～30mmの焼土を多量に含む。しまり・粘性ともに強い。)

第54号住居址土層説明

- 第14層：暗灰褐色土層(ϕ 1～2cmの小礫、 ϕ 5mm以下の炭化物を含む。しまり・粘性ともに有り、砂質である。)
- 第15層：明灰褐色土(ϕ 5mm以下の炭化物を若干含む。しまり・粘性ともに強い。)



第10図 児玉大久保遺跡C地点出土遺物

3. 遺物の概要

- 第10図 1 土師器甕である。第49号住居址から出土し、法量は口径20.6cm、孔部径10.6cm、器高28.9cmである。口縁部は直立気味で口端部へ向かってやや外反する。胴部中位に胴部最大径を有する。成形・調整上の特徴は、口縁部は内外ともにヨコナデ、胴部は外面がヘラケズリ、内面が横位のナデである。色調は内外面ともに淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には鉄斑粒・角閃石・白色粒子が中量含まれる。
- 2 土師器甕である。第53号住居址から出土し、法量は口径20.0cm、器高16.4cmである。口縁部は外反し、肩部はやや張る。成形・調整上の特徴は、口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部は外面は上半が横位、下半が縦位のヘラケズリであり、内側は横位のナデである。色調は内外面ともに橙褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、黒色粒子・絹雲母・白色粒子が中量、片岩粒・鉄斑粒が少量含まれる。残存率は40%を測る。
- 3 土師器甕である。第53号住居址から出土し、法量は口径10.2cm、器高7.7cmである。口縁部は外反し、肩部が張る。成形・調整上の特徴は、口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部は外面がヘラケズリ、内面は横位のナデである。色調は内外面ともに橙褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には黒色粒子が多量、絹雲母・白色粒子・角閃石・鉄斑粒が少量含まれる。残存率は10%を測る。
- 4 土師器甕である。第53号住居址から出土し、法量は口径12.8cm、器高は13.0cmである。形態的な特徴は、口縁部が外反し、肩部が張る。成形・調整上の特徴は、口縁部は内外面ともにヨコナデ、胴部は外側が斜位のヘラケズリ、内面は横位のナデである。色調は内外面ともに橙褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には、黒色粒子・絹雲母・白色粒子を中量、片岩粒・鉄斑粒を少量含む。残存率は30%を測る。
- 5 土師器坏である。第49号住居址から出土し、法量は、口径14.0cm、底径3.5cmである。形態的な特徴は口端部は尖り気味で口辺部はやや内傾する。器形の歪みが著しい。成形・調整上の特徴は口縁部は内外面ともにヨコナデ、底部は外面がヘラケズリ、内面はナデで有る。色調は内外面ともに橙褐色を呈し、焼成は普通である。胎土には鉄斑粒が多量に、白色粒子・片岩粒・黒色粒子が少量含まれる。残存率は70%を測る。
- 6 土師器坏である。第49号住居址から出土し、法量は口径は13.6cm、器高は4.0cmである。形態的な特徴は口辺部が内彎気味であり、底部は偏平気味で丸底を呈する。成形・調整上の特徴は、口縁部は内外面ともにヨコナデ、底部は外面がヘラケズリ、内面がナデである。色調は、内外面ともに橙褐色を呈し、焼成は普通である。胎土には、鉄斑粒・黒色粒子を中量、絹雲母・角閃石・白色粒

- 子が少量含まれる。残存率は80%を測る。
- 第10図 7 土師器坏である。第49号住居址から出土し、法量は口径12.1cm、器高は3.2cmである。形態的な特徴は、口唇部が外側に僅かに肥厚し、口縁部は丸みをもって立ち上がる。底部は偏平である。成形・調整上の特徴は、口縁部は内外ともにヨコナデ、底部は外面がヘラケズリ、内面がナデである。色調は内外ともに淡橙褐色を呈し、焼成は普通である。胎土には鉄斑粒・絹雲母が多量、白色粒子・黒色粒子が少量含まれる。残存率は80%を呈する。
- 8 土師器坏である。第54号住居址から出土し、法量は口径13.2cm、器高は3.7cmである。形態的な特徴は、口縁部は内傾気味である。底部は偏平気味で丸底を呈する。成形・調整上の特徴は、口縁部は内外面ともにヨコナデ、底部がヘラケズリ、内面がナデである。色調は内外面ともに淡橙褐色を呈し、焼成は普通である。完形である。胎土には角閃石・絹雲母・白色粒子・鉄斑粒が多量、石英・片岩粒が少量含まれる。
- 9 須恵器広口壺である。第54号住居址から出土し、法量は口径28.1cm、器高は10.0cmである。形態的な特徴は、口端部は外側に面を成し、沈線が巡る。口縁部は外反する。肩部はやや張る。成形・調整上の特徴は、内外面ともにロクロナデ調整である。色調は内外面ともに灰褐色を呈し、還元焼成である。胎土には絹雲母が多量、白色粒子・小礫を中量、片岩粒が少量含む。残存率は30%を測る。
- 10 須恵器坏である。第53号住居址からの出土し、法量は口径14.3cm底径8.7cm器高3.6cmである。形態的な特徴は、口端部はやや尖り気味である。口唇部は僅かに肥厚する。口縁部は僅かに外反する。体部は、下位にやや張りを有し、直線的に立ち上がる。成形・調整上の特徴は、内外面ともにロクロナデ調整であり、底部外面は回転ヘラケズリ調整である。内外面ともに灰色を呈し、還元焼成である。胎土は鉄斑粒を中量、黒色粒子・砂粒・白色粒子を少量含む。残存率は70%を測る。
- 11 須恵器坏である。第53号住居址からの出土し、法量は口径12.8cm、底径6.8cm、器高4.1cmである。形態的な特徴は、口端部は丸い。口唇部は僅かに肥厚気味である。口縁部は僅かに外反する。体部は直線的に立ち上がる。成形・調整上の特徴は内外面ともにロクロナデ調整であり、回転系切りによる底部切り放しの後、底部外周に回転ヘラケズリが施される。内外面ともに灰色を呈し、還元焼成である。胎土には白色粒子、白色針状物質が多量、黒色粒子が微量含まれる。残存率は40%を測る。

第四章 児玉大久保遺跡出土の土師器大形甗

はじめに

児玉大久保遺跡第49号住居址からは、真間期に相当すると思われる土師器大形甗が出土している(第10図1)。該期における土師器甗の出土事例はごく少量であり、器種として系統的に辿ることが難しい。しかし、こうした真間期における少量の土師器甗の存在は、調理法や食文化の変化により調理具としての目的性が低下して淘汰された結果をしめすのではなく、木器などの異なる形での「甗」の存在を示唆するものであると考えられる。むしろ“甗”の消滅に象徴的である鬼高式から真間式にかけての器種組成の変容が、律令期における社会的分業の再編成に伴う貢納物の負担体系の変容と相関している可能性を考えるべきであろう。本章ではこうした視点に準拠した上で、若干の問題提起を行うこととし、まとめにかえたいと思う。

1. 土師器甗の年代と類例

第49号住居址出土の土師器甗の共伴遺物には土師器坏3个体(第10図5・6・7)がある。いずれも残存率が良好だが第10図5・6の坏は将監塚・古井戸第4期または5期(赤熊 1988)、7の坏は将監塚・古井戸第10期または第11期に相当し、時期差が認められる(第11図)。しかし土師器甗の成形や調整および焼成・胎土の特徴から、前者の時期に相応するものであると考えられる(註1)。また、同時期の土師器甗との製作技法上の類縁性が認められ、専門的集団によって製作されたものであるが、形態的には鬼高式大形甗の系統に連なるものではない。

甗の出土事例

8・9世紀代においては、土師器甗の出土事例が稀であることは注意すべき点であろう。真間・国分期を通じて北武蔵周辺地域では土師器甗は器種として通時的に確認することができない。しかし、鈴木分類7類(鈴木 1983)、将監塚・古井戸6期に対比される岡部町六反田遺跡第143号住居址出土の事例(第12図5)、鈴木分類9類、将監塚・古井戸第9期に比定される神川町白樹原遺跡H8号住居址の事例(第12図13)など、真間・国分期においても土師器甗が少量ながら存在を確認することができる。また、前述の六反田遺跡、8世紀後半に比定される群馬県藤岡市大工ヶ谷戸遺跡の事例(第12図6)はいずれも形態及び口縁部成形・器面調整の手法に同時期の土師器甗との類縁性が認められ、児玉大久保遺跡のものと同様類似している。

なお、このような真間期以降に出現する土師器甗のほかにも、8世紀前半においては鬼高式系譜の土師器甗も認められるようである。ともあれ真間期以降

の土師器甕は、量的に少なく器種として系統的に把握できないものの同時期の他の器種と製作技法を共有しながら臨機的に製作されていた様を窺い知ることができる（第12図）。

2. 真間期土師器甕の存在形態

真間期に土師器甕が急減する背景には、二つの要因が考えられるであろう。ひとつは調理法や食文化の変化に要因を求めるものである。例えば甕の減少を「蒸す」調理法が非日常的・儀礼的な食事の調理においてのみ行われるようになったとする柿沼氏の見解（柿沼 1976）や、同様に外山政子氏は「蒸す」から「煮る」調理法への変化に結びつけながら、この要因を軍事的緊張の緩和に伴う糧貢納の意義の低下と解釈し説明するものなどがある（外山 1988）。もうひとつは容器の材質の変化に要因を求めるものであり、福田健司氏（福田 1977）や中村倉司氏（中村 1983）が甕の木製容器への転換を指摘している。しかし、土師器甕の真間式以降の急激な減少の要因を考えるときはむしろ後者のほうが妥当であると思われる。

なぜなら、調理・食事は伝統的で日常的な行為であり、その行為や、空間は調理具や供膳具といった“もの”によって構造化されていると見るべきであり、実態は変化しづらいと考えられるからである。つまり、土師器甕の減少ないしは消滅をもって即時的に調理法や食文化の変化に結びつけるよりも、土師器甕の「用途」が須恵器や木器といったものによって補完されてゆく可能性を考慮すべきである。例えば、関東でも千葉・茨城方面では土師器甕が残存し、栃木方面でも須恵器甕が一定の組成を占めているようであることも考慮すべきであろう。

なお、真間式以降に見られる器種組成の推移を見るに、減少ないしは消滅する器種は甕だけではなく、大形鉢や小形甕・小形短頸壺等も同様の過程をとっている傾向を指摘することができる。つまり、土師器甕の減少ないし消滅は、鬼高式から真間式における器種組成の変化という現象の一端を示すものとして位置づけることができる。

木製甕への転換

ともあれ、北武蔵周辺地域において真間・国分期を通じて散発的に土師器甕の出土が認められる状況は、むしろ該期の大部分の「甕」が、木器など現在まで遺存しがたいネガティブな存在形態をとっていたことを示唆するものであろう。管見に触れる限りでは北武蔵周辺地域における木製甕の出土事例を確認し得ない。しかし、坂井秀弥氏によって、新潟県鶴巻田遺跡・福島県佐平林遺跡・奈良県平城宮で木製甕底部の広域的な出土事例を指摘していることを踏まえれば（坂井 1983）、北武蔵周辺地域でも木製甕の存在を想定してもよいであろう

(註2)。そして、先に述べたとおり、真間期以降の土師器甗の急減を型式変化に伴う器種組成の推移といった現象の一端として捉えるならば、該期における社会的分業の再編成と貢納物の負担体系の変更として捉えることができる。そこで多摩ニュータウン遺跡群の事例を参考にしながら、北武蔵周辺地域における律令期木器生産の展開について触れておきたい。

3. 土師器甗減少の意義

多摩ニュータウン遺跡群の境川水系に属する地域では(註3)、律令期における木器の集中的生産が行われていたことが指摘されている(飯塚 1994)。たとえばNo.243・339遺跡では木製容器の未製品などが多く出土し、No.916・918遺跡では鉄製工具の出土する事例から木工生産関連遺跡としての位置づけがなされている。これらの遺跡では、古墳時代後期から平安時代までの木工品が多数出土しているが、生産の最盛期は9世紀後半～10世紀前半に求められており、この時期に公的に丘陵地帯が開発され、分業を前提とした集落が設営されたことが示唆される。児玉町においても、たとえば山崎上ノ南遺跡B地点埋没谷区域から、真間式から国分式の土器片を包含する層位で、盤・椀・曲げ物等の木器の出土しており(大熊 1997)、丘陵地帯の開発が及んでいることが確認できるとともに、児玉郡周辺においても木器生産が南武蔵地域と同様な展開をする可能性が想起される。

分業の計画性

鈴木徳雄氏は、律令期の集落の設営にあたっては、それが分業の単位と相關する可能性を指摘している。例えば土師器生産集落である加須市水深遺跡や鉄生産集落である伊奈町大山遺跡など特殊な手工業生産の営まれた集落での紡錘車の出土率が一般集落よりも低率であることから、該期における調庸物生産の集落間の補完関係について言及し(鈴木 1983)、分業に基づく集落が、在地首長の生産関係を前提とした在地交易圏の基礎単位として編成されることを想定している(鈴木 1991)。このように律令期の集落設営が分業に基づき計画的に行われる側面を踏まえれば、同様にその生産物の負担体系も「公権力」を媒介として分業集団間で調整され、作り分けられている可能性が想定できであろう。北武蔵周辺地域の真間・国分期における土師器甗の急減の要因を、木製甗への転換に求め、「甗」の製作者集団の変更を示す事象として捉えるならば、その傍証として位置づけること可能であると思われる。

ま と め

これまで述べてきたことを要約すると以下のとおりである。

- ① 第40号住居址出土の土師器大形甗は共伴遺物から、概ね8世紀前半に位置

づけられる。また、真間・国分期は土師器甕が急減し、出土事例が少ないことが指摘される。

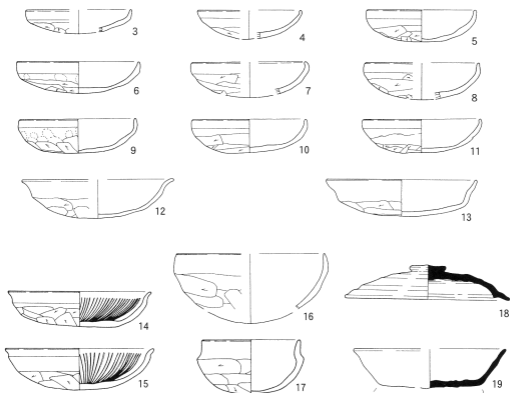
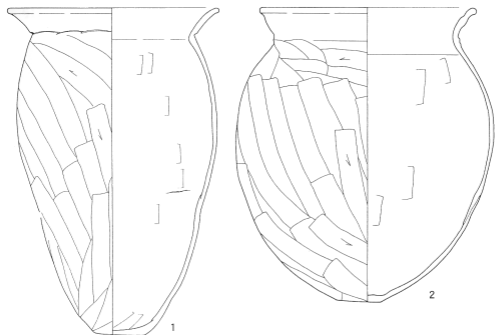
- ② 土師器甕が真間・国分期で急減する現象は、調理法や食文化の変化に伴う合理化や淘汰といった視点からは説明し難いものであると思われる。むしろ真間・国分期を通じて散発的に少量ながら土師器甕が出土することを積極的に評価し、相対的に甕が木製容器として製作され使用されていくことを暗示するものとして解釈してゆくべきである。
- ③ また一方でこうした現象は、鬼高式から真間式にかけて見受けられる器種組成の変化の一端を示すものとして捉えるべきである。また、この時期の器種組成の変化は律令期における社会的分業の再編成と貢納物の負担体系の変更を示唆するものとして考えることができる。
- ④ これまでに律令期の在地社会での集落設営の計画性と集落間分業が指摘されている。これと同様にその生産物についてもそれぞれの分業集団間で調整され、負担体系が成立していたことが想起される。

本章では、真間式に於ける土師器甕の急減を、鬼高式から真間式の間みる器種組成の変化の一端を示すものとし、律令期における社会的分業と関連付けて論述した。しかしながら、真間式以降、土師器甕が急減するとしながら、定量的な分析を捨象して論じた部分も否めない。また、具体的な現象の把握と検討にも乏しく、立論に関しても憶測に依存している感がある(註4)。今後、実証的に裏づけ、補正してゆく必要があるであろう。今後の課題としたい。

(櫻井和哉)

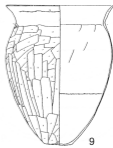
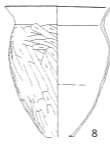
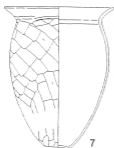
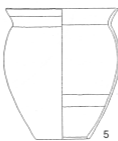
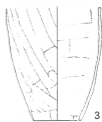
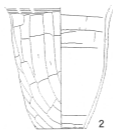
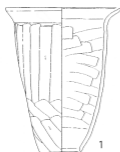
註

- (1) 口縁部が厚く、胴部との境にヘラケズリ時の工具の当たりによる段が有る。これは国分期に至って顕著である成形時の圧延によって器壁を薄くする手法ではなく、器厚の決定をヘラケズリに依存しており、鈴木分類5類まで確認される手法である。
- (2) また、「和名抄」では甕が木器として存在していることから、10世紀には木製甕が一般的であったとしている(坂井 1983)。
- (3) 相模国高座郡に比定されている。
- (4) 本文では真間期以降の土師器甕を“器種として系統的に辿れないが他の器種と製作技法を共有しながら臨機的に製作される。”としたが、8世紀前半では鬼高式系統の大形甕も残存し、鉢形の小形甕も散見されるところであり、図式的に転換するわけではない。また、9世紀以降は須恵器甕の出土事例も少量であるが認められ、その生産地や分布は地域的に偏在する傾向があるようである。時間性や地域性を踏まえたうえで重層的に現象を把握してゆく必要があろう。

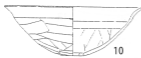


第11図 将監塚4期の土器群(1:4)

76住 12・13・16・18・19 : 121住 1・14・15・17 : 144住 2~11



※7～9は焼成後底部穿孔。転用甕。



第12図 土師器甕の出土事例（1：8）

- | | | | | |
|-----------|-------------|-----------|--------------|---------------|
| 1：居立95住 | 2：包樹原53住 | 3：包樹原102住 | 4：児玉大久保49住 | 5：六反田143住 |
| 6：大工ヶ谷戸 | 7：中道17地点34住 | 8：田代3住 | 9：武藏国府美好町56住 | 10：中道21地点SD14 |
| 11：居立106住 | 12：将監塚64住 | 13：包樹原48住 | 14：包樹原205住 | 15：西別府庵寺4住 |

引用・参考文献

- 赤熊浩一他(1988) 『将監塚・古井戸ー古墳・歴史時代Ⅱー』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 第71集
- 赤熊浩一他(2000) 『熊野／新田』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第251集
- 飯塚武司 (1994) 「多摩丘陵の木工生産」『研究論集Ⅶ』 東京都埋蔵文化財センター
- 飯塚武司 (1996) 「関東・甲信の木製容器の推移と生産」『第39回埋蔵文化財研究集会 古代の木製食器』 埋蔵文化財研究会
- 石塚三夫 (1996) 『用土北沢遺跡』 寄居町文化財報告書第16集
- 石塚三夫他(1998) 『田代遺跡』 寄居町遺跡調査会報告第15集
- 磯崎 一他(1995) 『今井川越田遺跡』 埼玉県埋蔵文化財事業団 第177集
- 岩瀬 譲 (1995) 『前・居立』 埼玉県埋蔵文化財事業団 第151集
- 岩瀬 譲 (1998) 『地神・塔頭』 埼玉県埋蔵文化財事業団 第193集
- 岩田明広 (1998) 『今井条里遺跡』 埼玉県埋蔵文化財事業団 第192集
- 柿沼幹夫 (1976) 「甕に関する考察ー南関東地方出土事例を中心として」『埼玉考古15』 埼玉考古学会
- 金子彰男 (2000) 『中道遺跡第16・17地点 中北原遺跡第3地点 保木野遺跡 反り町遺跡第1地点』 埼玉県神川町教育委員会文化財調査報告第19集
- 恋河内昭彦(1995) 『飯玉東Ⅱ・高縄田・桶越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋』 児玉町文化財報告書 第17集
- 恋河内昭彦(1990) 『雷電下遺跡ーB・C地点ー(図版編)』 児玉町文化財報告書第13集
- 恋河内昭彦(2003) 『大久保遺跡ーB地点の調査ー』 児玉町遺跡調査会報告書第14集
- 坂井秀弥 (1988) 「古代のごはんは蒸した「飯」であった」『新潟考古学談話会会報』 第2号 新潟考古学談話会
- 坂本和俊 (1981) 『金屋遺跡群』 児玉町文化財報告書 第1集
- 篠崎 潔他(1986) 『臼樹原・楡下遺跡ー発掘調査概報Ⅰー』 臼樹原・楡下遺跡調査会
- 篠崎 潔他(1990) 『臼樹原・楡下遺跡Ⅱ 奈良・平安時代編1』 臼樹原・楡下遺跡調査会
- 篠崎 潔他(1991) 『臼樹原・楡下遺跡Ⅱ 奈良・平安時代編2』 臼樹原・楡下遺跡調査会
- 篠崎 潔他(1992) 『臼樹原・楡下遺跡Ⅱ 奈良・平安時代編3』 臼樹原・楡下遺跡調査会
- 鈴木徳雄 (1983) 「古代北武蔵における土師器製作技法の画期」『土曜考古』 第7号 土曜考古学研究会
- 鈴木徳雄 (1989a) 「古代児玉郡の開発と真下大溝」『真下境東遺跡』 児玉町文化財報告書 第9集
- 鈴木徳雄 (1989b) 「九郷用水の開鑿年代」『九郷用水関係資料集』 児玉町史資料調査報告 第12集
- 鈴木徳雄 (1991) 「古代児玉郡における集落設営の計画性」『辻ノ内・中下田・塚畠・児玉条里遺跡』 児玉町文化財報告書 第15集
- 鈴木徳雄 (1993) 「鬼高式大形鉢の意義」『土曜考古』 第17号 土曜考古学研究会

- 鈴木徳雄 (1996) 「金屋条里周辺の灌漑と開発」『東鹿沼・藤塚B1・児玉条里遺跡』児玉町文化財報告書 第21集
- 鈴木徳雄 (1997) 「古代児玉郡の灌漑と地域圏」『金佐奈C・児玉条里上田地区』児玉町文化財報告書 第25集
- 田村 誠 (1985) 『神川村遺跡群発掘調査報告Ⅳ』埼玉県児玉郡神川村教育委員会
- 田村 誠他(1998) 『中道遺跡第15・21・23・25地点 中北原遺跡第2・4地点 北下原遺跡』埼玉県児玉郡神川町教育委員会
- 鳥羽政之他(1997) 『滝下遺跡』埼玉県岡部町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 徳山寿樹 (1995) 『堀向・藤塚・柿島・内出・児玉条里遺跡』児玉町文化財報告書 第18集
- 徳山寿樹 (1996) 『藤塚遺跡-B2地点の調査-』児玉町文化財報告書 第22集
- 利根川章彦(1998) 『御林下遺跡』埼玉県埋蔵文化財事業団 第223集
- 富田和夫 (1985) 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉埋蔵文化財事業団 第150集
- 外山政子 (1987) 『甗について』『研究紀要4』群馬埋蔵文化財調査事業団
- 中沢良一他(1999) 『鍛冶屋峯遺跡・川向遺跡・森後遺跡』美里遺跡調査報告書 第10集
- 中村倉司 (1984) 『器種組成の変遷と時期区分』『土曜考古』第9号 土曜考古学研究会
- 西井幸雄 (1999) 『城見上／末野Ⅲ／花園城跡／箱石』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第211集
- 福田健司 (1986) 『古代から中世へ』『東京考古4』東京考古談話会
- 伴瀬宗一他(1996) 『今井川越田Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財事業団 第178集
- 増田逸朗他(1982) 『後張Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財事業団 第26集
- 丸山 修 (1997) 『田通遺跡』埼玉県上里町教育委員会
- 山本 靖 (1996) 『広木上宿遺跡-古代・中世編-』埼玉県埋蔵文化財事業団報告書第170集
- 雪田 孝他(1999) 『武蔵国府関連遺跡調査報告 23 天神町遺跡調査報告』府中市埋蔵文化財報告 第23集 府中市教育委員会
- 吉野 健 (1994) 『西別府廃寺(第2次)』熊谷市教育委員会

図 版





1. 児玉大久保遺跡C地点調査風景



2. 第48・49号住居址



1. 第49号住居址カマド



2. 第50・51・52・53・54号住居址(上から)



1. 第50号住居址



2. 第51号住居址



1. 第52号住居址



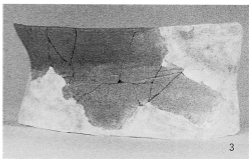
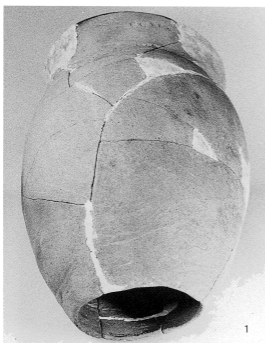
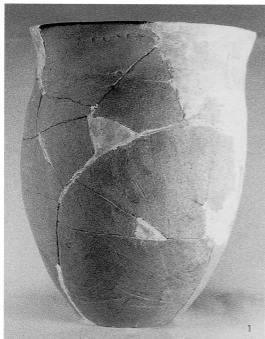
2. 第53・54号住居址



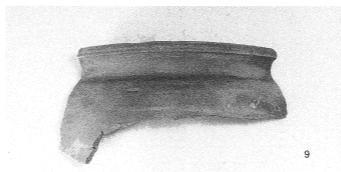
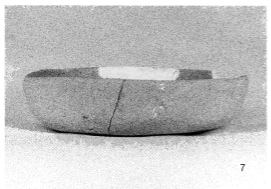
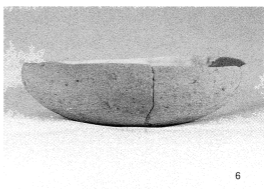
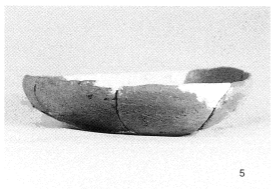
1. 第53号住居址遺物出土状態



2. 調査区全景



出土遺物(1)



出土遺物(2)

報告書抄録

フリガナ	コダマオオクボイセキ								
書名	児玉大久保遺跡								
副書名	C地点の調査								
シリーズ	児玉町遺跡調査会報告書	巻次	第17集						
編著者	櫻井和哉								
編集機関	児玉町遺跡調査会								
所在地	〒367-0298 埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368 TEL 0495-72-1331								
発行日	2004年(平成16年)3月31日								
所収遺跡	所在地		コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡					
児玉大久保遺跡C地点	児玉郡児玉町大字児玉字下久美塚1506-3外		113824	043	36° 11' 03"	139° 09' 19"	19941207 } 19950117	500㎡	建物建設
所収遺跡	種別	主な年代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
児玉大久保遺跡C地点	集落	古代	竪穴住居址・土壙			土師器 須恵器			

児玉町遺跡調査会報告書第17集

児玉大久保遺跡

－ C地点の調査－

平成16年3月31日印刷

平成16年3月31日発行

発行者 児玉町遺跡調査会
埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所 たつみ印刷株式会社
埼玉県深谷市東大沼356番地